



No. 29

地質ニュースNo.448号に続いて、本年度上期の地質標本館の活動状況をお知らせいたします。

この期間の活動として特に取り上げたいのは、いくつかの特別展の企画です。これまでの地質標本館は、開設以来地質調査所での研究の成果を岩石・鉱物・化石標本やパネル等によって紹介する常設展中心の展示形態を取ってきましたが、その内容が最近の研究テーマの変化や研究の進展にともない、多少陳腐化してきたことは否めません。そこで地質標本館では研究の成果を少しでも早く、できるだけ多くの方々に知っていただくこと、本年度から特別展を試みることにしました。その第一弾が先にご紹介いたしました特別展「大陸の衝突と資源：中東地域のエネルギー・鉱物資源」でした。この展示は科学技術週間後6月いっぱい続けられました。以下、これに引き続くいくつかの特別展を中心に、この期間の地質標本館の活動をお伝えしたいと思います。

緊急特別展示「雲仙火山 1991年噴火と活動史」

1990年11月17日に噴煙をあげて以来活動の続いた長崎県雲仙普賢岳は、1991年5月下旬に至って溶岩ドームを形成しました。活動の活発化を背景に、おもに環境地質部および地質情報センターの協力を得て、雲仙火山に関する特別展示を6月上旬に実施するように準備してまいりました。まったく悪しき偶然というべきでしょう。ご存知のように雲仙火山は6月3日に大火砕流を発生し、多くの死者・不明者を出すに至りました。このため6月8日から始まった緊急特別展示は、開始以来多くの方々の関心を集めることとなりました。

この展示の内容は雲仙火山の地質図・活動史・衛星画像・光波測距データなどを示すパネル、標本館所蔵の雲仙火山の岩石のほか、活動中の溶岩ドームの変化を記録した写真や、流れ下る火砕流を記録したビデオなどです（地質ニュース444号参照）。雲仙火山と同じくフィリピン海プレート上にある、フィリピンのピナツボ火山の噴出物もお目見えいたしました。

この特別展は19件に上る新聞・テレビの取材を受け、首都圏を中心に広く報道され、この結果6月の入館者数

1991年5月—9月の話題から 特別展を中心に

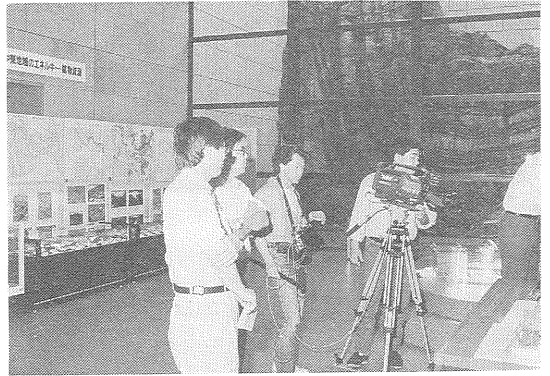


写真1 取材中の報道陣と解説する曾屋火山地質課長（左端）

は4,322人と昨年同期を大きく上回りました（写真1）。火山活動の長期化にともない展示はその時々状況に合わせて少しずつ変えられ、予定を延長して現在も続けられています。

それにしても、当初企画した展示の準備が一段落ついたまさにその日に、大火砕流発生ニュースを耳にした時の衝撃は、今でも忘れられません。犠牲となった方々の冥福と、被災された方々に一日も早く平穏な毎日が戻りますことを、心からお祈りいたします。

特別展「地球化学アトラス—北関東地域」（7/22～9/27）

夏休みの期間には2つの特別展を企画いたしました。そのひとつが「地球化学アトラス—北関東地域」の特別展です。これは1985年から1989年にかけて実施された国立機関公害防止等試験研究「地球化学図による元素のバックグラウンドと人為汚染の評価技術に関する研究」の研究成果を、ご紹介しようというものです。この研究は、茨城県北部を中心とする北関東地域をモデル・フィールドとして、私たちの日常生活する地表にどういった種類の元素がどのように分布しているのかを、河川堆積物試料（川にたまった砂・泥）を数多く化学分析して明らかにする事を目的としていました。特別展開催にあたっては、伊藤司郎地球化学課長はじめ、地殻化学部の協力を頂きました。

会場の標本館1階ホールには、元素分布を示すカラーのメッシュマップ等色彩豊かな図表のほか、野外での試料採集や実験室での分析作業の様態などを記録した写



写真2 カラフルなパネルがあふれる特別展「地球化学アトラス—北関東地域」の会場。標本館1階中央ホールが一段と華やきました。

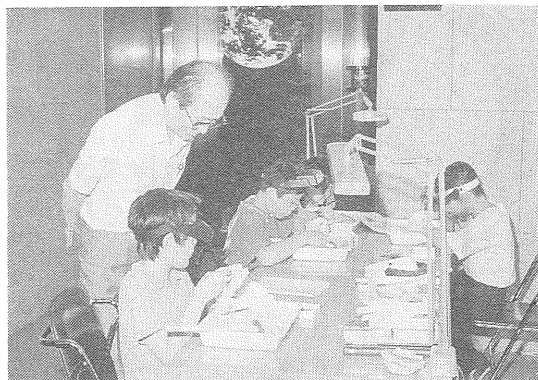


写真3 尾上主研指導のもと、化石を含む岩石をたがねで割る小学生達。さあ、何がでてくるか？

真が多数並べられました(写真2)。実物の河川堆積物をおいた実体顕微鏡もなかなかの人気の、希土類元素の異常濃集の原因となった重鉱物などをのぞく人の姿が絶えませんでした。

なおこの特別展に出展された元素分布図などは、「地球化学アトラス—北関東」として地質調査所から刊行されています。またパネルなどは特別展終了後も標本館2階通路に引き続き展示いたしました。

特別展「30万年前の植物を探る」(7/22~9/27)

夏休み中のもう一つの企画は、栃木県塩原の第四紀の植物化石を中心とした特別展「30万年前の植物を探る」でした。この企画は、地質標本館の尾上亨主任研究官が長年にわたって収集・研究してきた塩原地域の植物化石約100点を通して、今から約30万年前の古環境を考えて見ようというものです。パネルや試料を展示するだけでなく、実際に岩石から化石を取り出す作業を経験していただくという、体験型企画も取り入れました。会場ではこの植物化石を取り上げたビデオ「植物化石から古環境を探る」も同時に上映いたしました。

おりからの地球環境ブームもあって、先の地球化学アトラスの特別展と植物化石の特別展は多くの方々の関心を集め、化石を含むシルト岩の試料を小割りするカンカンという音が連日響いていました。夏休みの子供だけでなく(写真3)、団体で見学にこられた大人の方々にも広くお楽しみいただき、参加していただいた方の数は延べ1,145人に達しました。この塩原産植物化石は、標本館2階休憩室の前の通路に引き続き展示しております。

夏休み岩石・鉱物・化石相談(8/22)

今年で9回目となった夏休みの岩石・鉱物・化石相談
1992年3月号

は、8月26日(月)に開かれました。当日は、例年のように“秘蔵の”収集品を抱えた子供達などで、朝からにぎわいました。参加人数は40人と昨年に比べ少なかったのですが、今年の相談の特徴はなんといっても内容の濃さにありました。大量の化石と密度の高い質問で、専門家の前で一時間も粘った大学生、鉱物・岩石のプロが見過ごしていた産地から見事な方解石の結晶を採集してきた親子、学園にほど近い山ノ尾のペグマタイト産地からは大きな緑柱石の結晶が小学生の手によって持ち込まれました。標本館員にとっても、これまで蒔いた種が芽ぶくのを実感できた一日でした。

入館者状況

今年度4月から9月までの入館者は19,722人(うち外国人752人)でした。10周年記念行事のあった昨年を、2,323人上回っています。これは4月から続いた特別展にともなう増加と思われます。入館者累計は9月末で369,500人になりました。

来館者の内容をみると、大学生と小学生が増加しているものの、高校生と中学生はむしろわずかながら減少しています。受験の影響でしょうか？一方、小・中・高校の理科部会の先生方の見学は多くなってきております。また社会人の中では公民館などで活動する高齢者の方々のパワーに、圧倒的なものを感じずにはおられません。来館いただいたVIPとしては、中尾通産大臣(当時)や、インドネシア農業省副大臣等がおられます。また、外国人の見学者は、昨年同期の573人と比較して明らかな増加傾向となっております。

(地質標本館：奥山(楠瀨)康子, 利光誠一, 小沢素子, 豊 遙秋)